

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 30 日現在

機関番号：30123

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02184

研究課題名(和文) 日本映像芸術の1960-1970年代：その歴史的全体像について

研究課題名(英文) Japanese Experimental Films of 1960s-1970s: A Historic Overview

研究代表者

阪本 裕文 (SAKAMOTO, HIROFUMI)

稚内北星学園大学・情報メディア学部・教授

研究者番号：30381908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究課題の目的は、1960年代から1970年代を中心とする日本の映像芸術を調査したうえで、作品等をデジタルアーカイブ化し、その成果を社会に還元することにある。この目的に沿って、研究代表者は映像作家である相原信洋、松本俊夫、中島崇などの調査と、作品等のデジタル化を行った。特に相原信洋の作品に関してはデジタル復元の作業を行い、残存するほぼ全て作品のデジタル化を達成することができた。それに併行して、研究成果を社会に還元するために、国内外の上映会にデジタルデータの提供を行った。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to investigate Japanese experimental films around the 1960s and 1970s, and digitally archive the works in order to contribute to the cultural legacy of the Japanese society. With this objective, I researched and digitized the works of Nobuhiro Aihara, Toshio Matsumoto, and Takashi Nakajima. For the Nobuhiro Aihara collection, I digitally restored and duplicated nearly all of the works. The digital data were provided to film screening inside and outside Japan.

研究分野：芸術

キーワード：アニメーション 実験映画 ビデオアート メディアアート メディア芸術

1. 研究開始当初の背景

近年まで、日本の映像芸術（本文中では便宜的に、実験映画・ビデオアートなどの、商業劇映画以外の実験的表現の映像作品を指してこのように呼称する）をめぐる状況は、美術館に対応する部門が存在する欧米圏のそれと比較して、恵まれたものとは言い難かった。日本国内において、このような映像芸術が公的な美術館や東京近代美術館フィルムセンター（現国立映画アーカイブ）の収集対象に含まれる機会は少なく、美術研究者・映画研究者や美術館学芸員が容易にアクセスすることができるような歴史研究基盤は、事実上不在の状態にあった。

そこで、欧米圏と比較して立ち遅れていた歴史研究基盤を生み出すために、研究代表者は本研究に先行する研究課題「戦後日本の映像芸術史 1950～2000：松本俊夫の実験映画・ビデオアートを中心に」（若手研究 B、平成 24～25 年度）に取り組んだ。この先行研究課題は計画された以上の成果をあげたといえるが、予算的な限界から、研究対象については個人の活動に絞るかたちを取らざるを得なかった。そのため同時代の歴史的な状況については、調査研究の余地が残されたままであった。そこで、研究代表者は戦後日本の映像芸術の越境性を包括的に捉えるために、1960～1970 年代を中心とした日本の映像芸術についての調査研究を、継続して進める必要があるとの考えに至った。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、1960～1970 年代を中心とした日本の映像芸術についての調査研究を行い、その成果物としてのデジタルアーカイブ化された映像作品および文書・文献資料を、研究者や国内外の美術展覧会・上映会に提供してゆくことにある。それによって研究成果を社会に還元し、国外の状況と比較して立ち遅れていた、日本国内における映像芸術の研究基盤の拡充に寄与することを最終的な目的とする。

3. 研究の方法

研究を行うにあたっては、先行研究課題に引き続き、戦後日本の映像芸術を牽引してきた映画監督・映像作家である松本俊夫氏を調査研究の対象とした。これに加えて、1960 年代に活動を開始して、実験映画・個人映画とアニメーションの文脈を架橋する活動を展開した越境的なアニメーション作家である相原信洋氏と、1970 年代に登場した第二世代の作家のなかでも重要な作品を手がけてきた作家である中島崇氏も調査研究の対象とした。相原信洋氏を調査研究の対象とした理由は、実験映画・個人映画とアニメーションを包括的に捉える視座を確保するためである。中島崇氏を調査研究の対象とした理由は、中島崇氏の代表作であるフィルム作品『セス

ナ』を通して、8mm フィルムという制作条件が、1970 年代以降の日本の実験映画・個人映画にもたらした影響を明らかにするためである。

作品のデジタルアーカイブ化に関しては、可能な限り原版から上映用プリントを作成し、試写によるクオリティ確認を済ませたうえで、HD テレシネによってデジタル化作業を実施した。一連のラボ作業は（株）IMAGICA 社に発注され、最終的なデジタルデータは 1920×1080pixel/24fps/Prores422 のフォーマットにて完成された。ただし、相原信洋氏の作品については、多くの作品で画ネガが未編集で、かつ音ネガも存在しない状態であったため、当時の上映用プリントも HD テレシネして、研究代表者がデジタル環境での復元作業（サウンドトラックの抽出と、上映用プリントを参照した再編集）を行なった。また、文書・文献資料については、スキャンおよび写真撮影によるデジタル化作業を行い、それらの文書・文献資料を参照しながら作家本人への聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

平成 27 年度の研究活動においては、まず文献・文書資料類の調査と、東京国立近代美術館フィルムセンター・川崎市市民ミュージアム等の学芸員から作品収集状況のヒアリングを行った。そのうえで平成 27 年度の研究活動のなかでデジタル化作業に着手すべき作品として、松本俊夫氏と中島崇氏の作品を選定した。以下、個別に説明する。松本俊夫氏については、日本万国博覧会「せんい館」にて発表されたマルチ・プロジェクション作品『スペース・プロジェクション・アコ』（1970）のうち未デジタル化の 35mm フィルム原版 8 本と、ビデオアート作品『殺人カタログ』（1975）のデジタル化作業を実施した。また、1970 年代以降の松本俊夫氏のビデオアート作品についても、『Trauma』（1989）、『Old/New=気配』（1990）、『Dissimulation=偽装』（1992）といった作品のデジタル化が行われていなかったことから、その重要性を鑑みてデジタル化作業を行った。中島崇氏については、フィルム作品『セスナ』（1974）のデジタル化作業を実施した。この作業は原版の存在しない 8mm フィルムのデジタルアーカイブ化をどのように進めるべきかというテストを兼ねており、作業の過程で、今後の作業に関わる有益な知見を得ることができた。なお、『セスナ』のデジタル化作業の中間生成物である 35mm デュープネガについては、フィルム専用の温度湿度管理ができる環境にて保管されるべきという作者の意向を尊重し、東京国立近代美術館フィルムセンターに寄贈した。また、松本俊夫氏と中島崇氏それぞれに対する聞き取り調査も、合わせて実施した。

平成 28 年度の研究活動においては、まず京

都造形芸術大学の西宏志教授などと協力しながら、相原信洋氏の残存するフィルム（原画および上映用プリント）の調査と整理を進めた。そのうえで、平成 28 年度の研究活動のなかで作業すべき作品を選定し、デジタル化作業を実施した。また、1970 年代以降の作品についても、その重要性を鑑みて、デジタル化作業の対象に含めた。これらの作品のうち、特に上映用プリントについては、原画が完全な形で残存しない作品が多数存在しており、詳細な事前調査が必要であった。そこで、東京都国立近代美術館フィルムセンターに協力を求め、技術面での助力を得た。それにより、極めて詳細な上映用プリントの調査を行うことができた。また、平成 27 年度の研究成果を含む博士論文「前衛記録映画論の戦後の意味 1970 年までの松本俊夫の諸活動をもとに」を執筆し、戦後の映像芸術の発展に大きな影響を与えた松本俊夫氏の 1970 年までの活動を明らかにした。この論文は京都精華大学大学院芸術研究科に提出された。

平成 29 年度の研究活動においては、日本国内の 1960 年代から 1970 年代にかけての映像芸術（実験映画・ビデオアートなど）を調査しながら、相原信洋氏の現存するフィルム・ビデオ作品のデジタル化作業を完了させた。この作業は平成 28 年度に引き続いて行われたものであり、1960 年代から 1970 年代にかけての作品を基本としながら、その後の作家活動も含め包括的に明らかにすることができたと考える。また、平成 27 年度より継続していた、松本俊夫氏の映像素材などのデジタル化作業を完了させた。

平成 28～29 年度にデジタルアーカイブ化を完了した相原信洋氏の作品は、最終的に以下の通り。この他に、映像素材などのデジタル化作業も行なった。

『STOP』(1969)、『サクラ』(1970)、『やまかがし』(1972)、『おしろい羽根』(1972)、『みつばちの季節は去って』(1972)、『初春狐色』(1973)、『赤いギヤマン』(1973)、『逢仙花』(1973)、『うるし』(1973)、『短距離ランナー』(1973)、『妄動』(1974)、『新禿山の一夜』(1975)、『STONE No.1』(1975)、『STONE』(1975)、『LIGHT』(1976)、『雲の糸』(1976)、『カルマ』(1977)、『光』(1978)、『アンダー・ザ・サン』(1979)、『水輪カルマ 2』(1980)、『青マッチ』(1980)、『風触』(1980)、『BURNIN』(1980)、『SHELTER』(1980)、『MY SHELTER』(1981)、『リンゴと少女』(1982)、『BALBA』(1983)、『S=13』(1984)、『ニューメディア』(1984)、『逢魔が時』(1985)、『しゃぼん玉』(1985)、『PRIVATE』(1986)、『映像(かげ)』(1987)、『とんぼ』(1988)、『GAVORA』(1989)、『水の雲』(1989)、『雲の水』(1990)、『LINE』(1990)、『MASK』(1991)、『鴉』(1992)、『SPIN』(1993)、『気動』(1994)、『耳鳴り』(1995)

『RAIN』(1996)、『MEMORY OF CLOUD』(1997)、『YELLOW FISH』(1998)、『THE THIRD EYE』(1999)、『WIND』(2000)、『MEMORY OF RED』(2004)、『YELLOW NIGHT』(2005)、『YELLOW SNAKE』(2006)、『BLACK FISH』(2006)、『LOTUS』(2007)、『WATER』(2007)、『ZAP CAT』(2008)、『BLUE MOON』(2009)、『FLOWER』(2009)、『TEA TIME』(2009)、『IF』(2009)、『AMMONITE』(2009)、『8PM』(2009)、『TOMATO』(2010)、『DOT』(2010)、『SEED』(2010)、『CCBB』(2010)、『30』(2010)、『GIGI-GAGA』(2010)、『SKY』(2010)、『ジーベック』(?)

なお、研究期間の終了後は、特定非営利活動法人戦後映像芸術アーカイブを通して、研究成果を国内外の研究プロジェクトや展覧会・上映会に対して提供してゆく計画である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕
(博士論文)
阪本裕文「前衛記録映画論の戦後の意味 1970 年までの松本俊夫の諸活動をもとに」
2017 年、京都精華大学

(映画祭・上映会への研究成果提供)
「JAPANESE ART ANIMATION COLLECTION VOL.001」
会期：2016 年 10 月 28 日～30 日
催事・会場：Lumen Gallery (京都)

「Holland Animation Film Festival 2017 Winner's choice」
会期：2017 年 3 月 22 日～26 日
催事・会場：Holland Animation Film Festival (オランダ)

「相原信洋七回忌追悼映像展」
会期：2017 年 4 月 28 日～30 日
催事・会場：Lumen Gallery (京都)

「LOTUS 相原信洋作品上映会」
会期：2017 年 8 月 19 日
催事・会場：第 2 マルバ会館 (札幌)

「松本先生追悼 京都時代の映像展」
会期：2017 年 12 月 15 日～17 日
催事・会場：Lumen Gallery (京都)

「再：生成 相原信洋 Re:GENERATION Nobuhiro Aihara」
会期：2018 年 2 月 10 日～2 月 16 日
催事・会場：UPLINK (東京)

6. 研究組織
(1) 研究代表者
阪本裕文 (SAKAMOTO HIROFUMI)

稚内北星学園大学情報メディア学部情報メ
ディア学科教授
研究者番号：30381908